家族の「今」を照射する

――村上薫編『不妊治療の時代の中東――家族をつくる、家族を生きる――』アジ研選書 No.49、アジア経済研究所、2018 年 3 月――

村上　　薫

世界初の体外受精児がイギリスで誕生したのは 1978 年のことである。それから 40 年。生殖補助技術を用いる不妊治療は、世界の多くの地域で、子どもが欲しくてもできない人々に希望を与える画期的な医療として普及してきた。中東もその例外ではなく、1986 年にサウジアラビアで最初の体外受精が実施され、以後、富裕な湾岸産油国だけでなく、エジプトやモロッコなど経済的にけっして豊かでない国々でも、体外受精クリニックが次々に開設された……。

と、このように書くと驚かれる向きもあるかもしれない。中東ではイスラームによって性的なことがらが厳しく制限されており、体外受精などとても許されないのではないか。

たしかに、中東では、夫婦以外の第三者から精子や卵子の提供を受けることは、イスラームが禁じる姦通にあたると解釈されて忌避されることが多く、多くの国では法的にも禁じられている。だが、第三者を介在させない夫婦間の治療は、子をもつための手段としてむしろ歓迎され、急速に普及してきた。

中東では、男女とも「結婚し、親になって一人前」という考え方が根強く、不妊は男性や女性としてのアイデンティティを否定しかねない深刻な問題である。人々の人生の中心には「親になること」がある一方、イスラーム法解釈の影響により、養子縁組が不妊解決の選択肢になりにくい。こうした状況が、不妊治療が受容される背景をつくってきた。

現在、中東は体外受精や顕微授精などの生殖補助技術を用いる不妊治療がもっとも盛んな地域のひとつになっている。

●日本の家族の風景

不妊治療は、不妊に悩む人々に子どもをもつという希望をもたらした。しかし、不妊治療はけっして成功率の高い治療ではなく、また高価である。女性にとっては、身体的な負担も大きい。そのため不妊治療は、子どもをもつことへの希望や喜びだけでなく、新たな摩擦や葛藤を生んできた。

日本に住む私たちのまわりでも、ここ数年、新聞やインターネット上で、当事者の語りを通じて不妊治療の陰の部分にふれる機会がふえている。治療のやめどきをめぐる葛藤や、子どもをもてない人生への不安、あるいは経済的な負担が、治療にはつきまといがちだ。医学的には不妊の原因は男女半々といわれるにもかかわらず、語り手がしばしば女性であるという事実は、不妊にまつわる精神的身体的な苦痛や葛藤の多くを、女性が引き受けてきたことを物語っている。

不妊治療が苦しい理由のひとつは、血のつながりを重視する親子観であろう。近年の、特別養子縁組や里親制度への関心の高まりは、（異性と）結婚すべき、産むべき、のべき論

http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Sensho/049.html

で凝り固まりがちな「家族」をほぐし、風通しをよくする変化として歓迎したい。とはいえ、大勢はまだまだ血のつながった親子でなければ、という感覚なのではないか。

●中東の家族の風景

私たちが住む日本社会がそうした状況にあるなら、子どもをもつことへの期待が日本よりさらに高いと思われる中東で、人々は不妊や不妊治療という問題にどう向き合っているのだろうか。本書を編むきっかけは、そうした関心にあった。

個人的には、不妊治療という問題を考えた理由は、日本でも、フィールドとしてきたトルコでも、治療を新たに始めたり、治療のやめどきに悩んだりする友人が身近にいたこと、また私自身が子どもを産める年齢を超え、子どもをもたない人生について改めて考える機会がふえたことが大きい。

不妊治療をとりまく風景を眺めると、その社会の家族観や子ども観、男女に期待される役割やそれに沿えないときの選択肢といった、家族をめぐるあれこれがみえてくるのではないか。本書では、倫理的背景（主にイスラーム）と医療的背景にも目配りしつつ、エジプト、トルコ、イランを主な舞台として、不妊治療という切り口から、中東に生きる人々の家族の「今」に光をあてようとこころみている。

不妊治療をとりあげるこれまでの研究が、患者とクリニックに焦点をあてがちだったのにたいして、本書の特徴は、一歩引いたところから、不妊治療をとりまく人間模様を描くところにある。遠くから眺めると、中東では、結婚し、子どもをもって一人前という規範が維持されており、それが不妊治療の受容と普及の背景をつくっている。だが、少し近寄ってみると、当然のことながら、さまざまな理由から、規範とは異なる家族のかたちを生きる人々がいる。不妊が治療可能になった時代にも、子どもをもてない人はおり、あえてもたない人もいる。伝統と変化の中で、人々はそれぞれの状況や思いと折り合いをつけながら、日常を紡いでいるのである。

●身近な問題から想像する

日本人ジャーナリスト殺害を含む、各地でのテロ事件や難民問題などの報道に接するなか、日本では昨今、暴力に満ちた中東というイメージが以前にもまして強まっているように感じられる。不妊治療と家族という、私たちにとっても身近で切実なテーマを切り口とすることにより、暴力や抑圧で彩られた中東のイメージとは違う景色がみえてくるのではないか。それにより、中東という場や、そこに生きる人々への理解を深めることにつなげられるのではないか。本書には、そんな願いもこめられている。

（むらかみ　かおる／アジア経済研究所　新領域研究センター）